

岩手県九戸郡大野村における活動を通じた 地方小都市のまちづくりに向けた将来ビジョンと具体的提案に関する研究

—その1 まちの把握と課題の抽出—

大野村 まちづくり
地方小都市 ワークショップ

正会員 ○池田晃一*1 北澤猛*3
遠藤新*2 宮本裕太*1
安藤真理*1 阿部大輔*1
田中大朗*1

0. はじめに

都市部への人口流出が進み、日本各地で、過疎化、それにとまなう市街地の衰退が深刻な問題となり久しく、近年、各地で様々な取り組みが行われている。

この一連の考察は、岩手県九戸郡大野村を対象として一年間に行った活動をもとにした、地方都市の活性化の手法に関しての一考察である。一年目の昨年度では、住民主体のまちづくり活動がほとんど行われてこなかったまちにおいて、ワークショップという手法を用いることで、まちの将来ビジョンを住民とともに描いていく。そのことで、まちづくりのための土台として、まちづくりの意識を浸透させ、まちづくりのための組織をつくることを目的とした。それを土台として、二年目以降の施策へと展開させていく。

本稿では、その前段として行った、課題抽出、将来ビジョンの共有化の手法について、その手段と内容を整理し、分析、考察したものである。

1. 対象地の概要

大野村は岩手県の北端で、最寄りの鉄道駅であるJR二戸駅・八戸駅からそれぞれ車で一時間程の場所に位置する。人口約6400人(平成7年国勢調査より)、面積約135[!]、の田園の広がる村である。第一次産業に従事する人が多いが、農業生産高は下落気味で、近年では、多くの人が出稼ぎに出ている。

かつては豊富な砂鉄の地下資源と木炭燃料からなる山林資源を背景として「たたら」と呼ばれる炉を利用した製鉄業で栄えた。また、日本最古の盆踊り大会であるナニヤドヤラが毎年催され、東北中から人々が大野村へと集い、大変賑わう。

1988(昭和63)年に、村の中心に道の駅を兼ねた産業デザインセンターが設置された。村内のみならず周辺市町村からも多くの人を呼ぶ県内有数の観光施設である。「一人一芸の里」のスローガンのもと、村全体の魅力を向上させ、デザインセンターへ訪れる人々をまちなかに取り込み、にぎわいをつくるのが今後のまちづくりの課題である。

2. 活動の概要 (表1)

2000年9月に一回目のワークショップを行い、その成果を検討し、その後、2001年3月に再びワークショップを行い、来年度以降の施策への提案を行った。具体的な活動内容は以下の通りである。

まず、事前に資料や地図などで大野村の概要を把握した。

それをもって現地へ行き、まずフィールドワークやヒアリングなどの現地調査を行い、それらをもとに学生のなかでまちづくりの提案を作成した。その提案をワークショップの場で発表し、それをもとに、住民と議論を行い、提案をふくらませた。このワークショップは、大野村に関わる様々な人々が具体的なまちづくりへ関心を持つことへのきっかけづくりとなった。

一回目のワークショップの成果をもとに、特に調査を行った中心地区における、より実現可能な提案を作成した。それを再びワークショップの場で発表し、住民の関心の高かったプロジェクトにしぼり、ディスカッションを行った。そのなかで、来年度以降の具体的施策の展開を打ち出し、そして、そのための組織づくりの第一歩として、「大野まちづくり宣言」を行った。

(表1: 活動の内容)

	事前調査 (大野村概要の把握) 広域構造/同規模都市との比較分析/歴史の変遷から見た大野村/中心部の土地利用の現況
2000.9.15-17	現地調査 大野村全域の見学/村の人達とともにフィールドサーヴェイ/商店街などへのヒアリング
2000.9.17	第一回ワークショップ 学生からの調査・提案発表 3班に分かれてディスカッション まちなか村/まちなかネット/まちなかスポット テーマ: “探そうまちの資源” / “皆でつくる100の提案” ⇒ 89の提案
	プロジェクトの構想 ワークショップの成果をもとに具体的提案の作成 大テーマ『キャンパスビレッジ』 11の小テーマ、32のアイデア ⇒ 中心部への9つの具体的プロジェクト
2001.3.27	第二回ワークショップ 学生による提案の発表 各提案の人気投票 上位3つのプロジェクトについてそれぞれ3班に分かれてディスカッション 街灯の設置について/商店街の活性について/クラフトマンとまちについて ⇒ 大野まちづくり宣言、将来ビジョンの共有化

Study on The Future Visions and Concrete Proposals of Community-Planning in Local City: A Case in Onomura

Part 1: How to Understand City and Extract Problems for Community-Planning

IKEDA Koichi et al

3. 調査の概要

(1) 大野村の構造 (図1)

歴史をみてみると、大野、帯島、水沢、阿子木の4つの地区が1979年(明治12)に合併し、現在の大野村となった。それぞれの地区ごとに、統合する以前からの学校など、公共施設があり、各地区の独立性は依然高い。

地形をみてみると、有家川と旧街道が平行に走っており、それらと直交するように高家川、大野川の二つ川がある。これら4本の線に沿って小さな集落地が点在している。そして、大野川と旧街道の交わるところにかつて大いににぎわっていた大野村中心地区がある。

また、1984年(昭和59)に村の中央を東西に貫く国道395号線大野バイパスが開通し、そのバイパス沿いに、道の駅を兼ねる産業デザインセンターが開設された。これにより、大野村にはそれまでの構造とはまったく別の構造が挿入されることになった。しかし、それらは互いに交わることなく、デザインセンターが多くの観光客を呼び寄せ活性化していく一方で、周囲のそれぞれの地区はその恩恵を受けることもない。

(2) 中心部のにぎわいについて

5のつく日には、村の中心部の大野地区の商店街で、各商店の軒先を使って「市」が開かれる。「市」には周囲から多くの人々が出店しに、また、買い物に来る。かつては訪れる人も多く、店先でお酒を飲んだり、食事をしたり、さらには宿泊する人もおり、にぎやかであった。しかし、現在では、以前に比べると出店の数も減少し、訪れる人々も野菜や果物などを買って帰るだけである。「市」に関連し

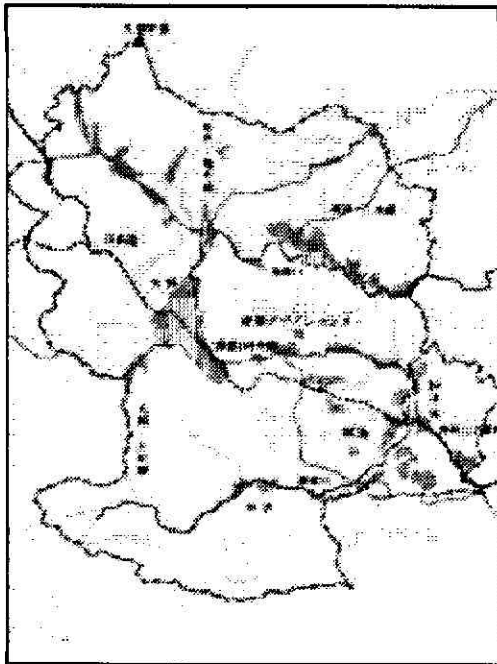


図1：広域構造図

て、数年前に商店街のイベントで、ベンチを配り各商店の軒先に設置した。いまだ、そのベンチが残っているところもあり、そのような場所では、井戸端会議が行われている。

また、かつては「市」とは別に「マーケット」が催されており、周りの各商店とのつながりのなかでにぎわいの核となっていた。

中心地区では商店街が舞台となり、各商店の小さな工夫が中心となってまちのにぎわいをつくっていた。しかし、現在では、商店会と名の付くものはなく、特別な活動は行っておらず、商店街としての取り組みは行われていない。

(3) まちなかの資源について (図2)

茅葺き、蔵、町屋、洋館などまちの資源となりうる建築物の分布、空き家の分布、建物の材質・階数、商店の構成、街灯の設置状況、などをフィールドワークによって調査した。田圃に囲まれ、その向こう側に山が連なる自然風景、それに囲まれて、まちのなかを川が流れ、様々な良好な資源が散在している。

村の中心部である大野地区は、様々な地区の人々の交流の場としての役割を持っている。現在の自然風景を守りながら、そのような資源を活かして、まちづくりを行っていく必要がある。

4. 課題

以上のような調査・分析により、村の資源、まちづくりビジョンを住民らと共有認識すると同時に、以下のような課題を抽出することができた。

(1) 村全体について

- ・デザインセンターも含め、散在する各地区の個性を強める。
- ・各地区相互の結びつきを強化する。(キャンパスビレッジ)

(2) 中心部について (にぎわいの再生)

- ・市の開催にあわせて商店街としてのにぎわいの仕掛けを行う
- ・茅葺き・町屋・蔵、空き家を活用する。
- ・木工を用いてまち並みの修景を行うことで、大野らしさを演出する。
- ・まちの中心部に蔵を活用してマーケットが行われる場所をつくる。
- ・継続的にまちづくりについての議論ができる組織、場をつくる。

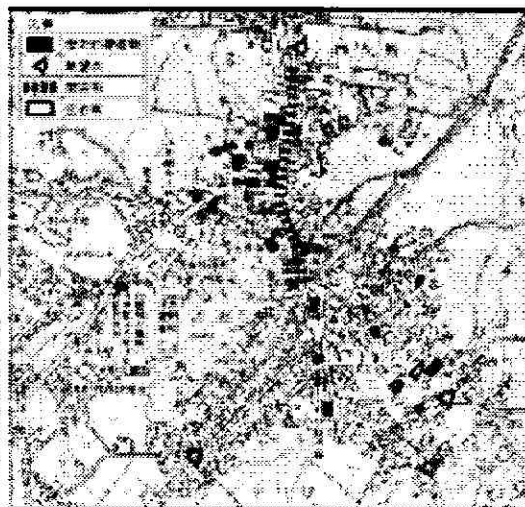


図2：中心地区の資源マップ

*1 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程

*2 東京大学大学院工学系研究科 助手

*3 東京大学大学院工学系研究科 助教授

Graduate School, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering Univ. of Tokyo
Associate Prof., Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering Univ. of Tokyo
Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering Univ. of Tokyo